



特集

「ドキュメンタリー映画祭」という
地域の宝ものを教育や研究に生かし、
大学からは知的・人的協力をより積極的に。

研究室訪問 / 地域教育文化学部・農学部

地すべりの全容解明に挑む、
農地の復興を支援する。



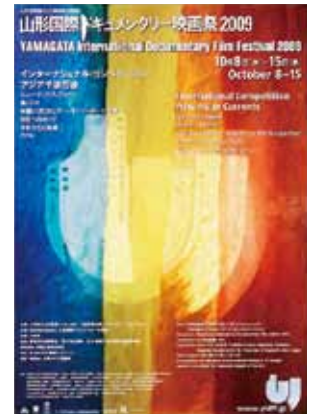
第1回上映会「極北のナヌク」の開催を告知するために岩久保さん、岡田さんの2人が手掛けたフライヤー。この手づくり感がドキュメンタリー映画っぽくていい。

特集

「ドキュメンタリー映画祭」 という地域の宝ものを 教育や研究に生かし、 大学からは知的・人的協力を より積極的に。

1989年から隔年開催されている「山形国際ドキュメンタリー映画祭」は今年で11回目。これまでも本学の先生や学生たちはさまざまなカタチで映画祭と関わってきたが、今年、山形大学と山形国際ドキュメンタリー映画祭が相互協力協定を締結したことを受けて、人や情報の交流が一段と盛んになってきている。ここでは、その中の代表的な取り組みのいくつかを紹介しておこう。





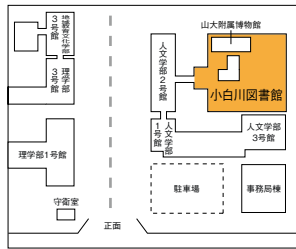
山形国際ドキュメンタリー映画祭とは？

1989年に山形市の市制施行100周年を記念して開催された映画祭が、以後、隔年(奇数年)イベントとして定着、今年で11回目を迎える。ドキュメンタリーのための映画祭としてはアジア地域で初ということもあって、アジアを中心に世界中の映画作品や監督が集まる、まさに国際色あふれる映画祭へと成長。コンペティションは、インターナショナル・コンペティション部門と、アジアのドキュメンタリー作品を対象としたアジア千波万波部門がある。世界の優れたドキュメンタリー映画が鑑賞できる希少な機会であり、新しい才能が発掘される場としても注目度を集めている。

山形市制施行120周年記念事業
 「山形国際ドキュメンタリー映画祭2009」
 会期:2009年10月8日(木)~15日(木)
 会場:山形市中央公民館6F、山形市民会館大ホール・小ホール、
 フォーラム3、フォーラム5、ソラリス1

小白川図書館でドキュメンタリー映画を鑑賞できます。

小白川キャンパス人文学部2号館南側に図書館があり、その一角がシアタールームとして整備された。上映会は、一般の方の参加も歓迎している。



大学と映画祭、相互協力協定により本格的な協力関係を構築

本年8月4日、山形大学は、教育やスタッフ派遣などで互いに協力し地域文化の発展に貢献することなどを目的に山形国際ドキュメンタリー映画祭との相互協力協定を締結。具体的な協力活動としては、大学からは、映画祭などへのボランティア派遣、図書館のドキュメンタリー映画ライブラリーの充実と上映会の開催を行うことなど、映画祭からは、フィルムへの貸し出しや実習機関としての学生受入れ、映画監督による講演会の開催などを行うことなどが予定されている。以前から先生方による語学協力や学生たちのボランティア参加など、本学も個人レベルでは山形国際ドキュメンタリー映画祭とさまざまな関わりを持ってきた。特に、人文学部人間文化学科でフランス文化論やフランス文学、映像学、映画論などを指導している阿部宏慈先生と映画祭の関わりは深い。当初は観客として、中盤からはゲスト・アテンドのボランティアとして、そして現在は映画祭の理事となり、インター



ナショナル・コンペティションの選考委員も務めている。

さらに、山形国際ドキュメンタリー映画祭という素晴らしい活動を大学の学生たちの教育・研究・活動に生かしたいと考えていた人文学部人間文化学科の山崎彰先生と法経政策学科の松本邦彦先生は、阿部先生の仲介を得て、映画祭を自らの研究題材として取り組むと同時に授業にも取り入れはじめていた。こうして映画祭と山大を結ぶ点は線となり、協定締結というカタチとなって、より確固たるものとなっていった。

学内で上映会を開催 映画祭への興味を喚起

山崎先生と松本先生が担当している「地域づくり特別演習(二)」は、地域における非営利の市民活動に対する認識を深めることを目的とする授業。その受け入れ団体の一つとして昨年山形国際ドキュメンタリー映画祭が加わった。「山形国際ドキュメンタリー映画祭という素晴らしい宝物をもっと市民のみなさんに観てほしいと思うのですが、なかなかその声が届きません。そ

こで、まず大学の学生たちにドキュメンタリー映画祭の魅力を伝えて、そこから周囲に広めてもらえればとの思いもあります」と松本先生。今年度は2名の学生が受講し、映画祭の開催時には会場係を務めることになっている。岩久保円花さんと岡田真奈さん、ともに人間文化学科の2年生。映画が好きという理由で選択はしたもの、山形国際ドキュメンタリー映画祭を実際に観た経験もなければ、ドキュメンタリー映画の知識も全くなかったという二人。先生方の話を聞いたり、勧められたドキュメンタリー作品を観たりするうちに、その魅力に気づき、もっといろんな人に観てほしいと思うようになったという。7月23日には、映画祭の予告PRを兼ねた上映会を大学図書館内のシアタールームで開催。その中心となってポスターの作成や集客に携わった2人は、イベント運営の大変さの一端に触れた。上映作品は、ドキュメンタリー映画の父ともいわれているロバート・フラハティ監督(映画祭の大賞はロバート&フランシス・フラハティ賞と命名されている)の『極北のナヌーク』、入門編にふさわしい作品として映画祭事務局の人が推薦してくれたのだ。

おすすめドキュメンタリー映画ガイド



極北のナヌーク

ドキュメンタリー映画の始祖フラハティの映画史に残る記念碑的作品。アラスカの大地に生きるイヌイットの猟師ナヌークを主人公に、力強く生きる人間の営み。
 監督:ロバート・フラハティ/アメリカ/1922年



ルート1

第一回の映画祭で市長賞に輝いた作品。アメリカ東海岸の国道一号線(ルート1)をカナダ国境からフロリダ半島まで辿る、ロードムービー・ドキュメンタリー。
 監督:ロバート・クレイマー/フランス/1989年



動物園

アメリカ、ダイレクト・シネマの巨匠ワイズマンによる動物園の記録。組織としての動物園、その中で働く人びとの様子が、説明を排した端正な映像で示される。
 監督:フレデリック・ワイズマン/アメリカ/1993年



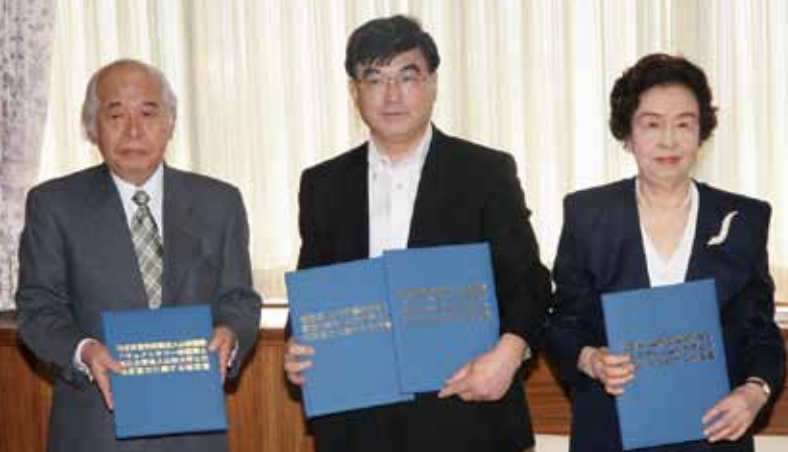
阿賀に生きる

佐藤監督は、山形映画祭でドキュメンタリーを学んだ、とさえ言い切っていた。新潟水俣病被害の実態を鋭くえぐり、そこに暮らす人びとへの深い共感を漂わせる。
 監督:佐藤真/日本/1992年



エルサレム断章

イスラエル、パレスチナの問題は、世界の人びとにとっても映画祭にとっても重要な問題だ。ここではイスラエルへの屈折した愛を語る。
 監督:ロン・ハヴィリオ/イスラエル/1997年



相互協力協定の締結式に臨んだ山形国際ドキュメンタリー映画祭の大久保義彦副理事長(左)と結城学長。右は同時に協定を結んだ山形交響楽協会の三宅高子理事長。



シアタールーム近くに設けられたドキュメンタリー映画のライブラリー。協定の締結を機に収蔵作品はさらに充実。館内で鑑賞できる。



松本邦彦

まつもとくにひこ ●人文学部法経政策学准教授/専門は、政治学、在日外国人問題など。地域に密着しながら国際的なレベルを誇る映画祭に賛同。自らの研究に、学生の授業に生かしたいという希望が昨年があった。

次回の上映会は、映画祭の興奮さめやらぬ10月下旬か11月上旬ごろを予定しており、その作品選定についても2人はより積極的に関わるようになってきている。

また、大学の図書館にもドキュメンタリー映画の映像ソフトコーナーもあり、そのライブラリーがかなり充実しているということをもっとアピールしたい、同じドキュメンタリー作品を観た者同士が集まって語り合える、読書会のような会を設けたいなど、さまざまな課題や構想が浮かんできているようでもある。映画祭当日の会場係としての活躍とともに、学内における今後の活動にも期待できそうだ。

迫力、説得力が違うドキュメンタリーの映像の力を研究に生かす

一方、学生たちの指導と同時に山崎先生



と松本先生の映画祭を題材とした研究プロジェクトも着々と進行している。映画祭20年間の応募作品の中には、さまざまな分野の研究や教育に生かせるものも少なくない。映像の力、ドキュメンタリーならではの説得力を活用しようという考えだ。大学が映画祭と連携して研究プロジェクトを行うというのは異例で、一つのモデルケースになっていくものと思われる。まさに、時代や国、民族の状況、課題などがそのまま作品に反映されるドキュメンタリー映画祭だからこそ意味をなす連携と言える。

山崎先生は、引きこもりなど若者の姿を映し出す「現代若者とメディア」分野、松本先生は在日外国人を取り上げた「東アジアにおけるマイノリティ」分野の研究に取り組んでいる。“在日”に関しては、以前、映画祭で特集が組まれたこともあって作品群は特に充実しており、大変興味深い題材となっている。また、それぞれの研究テーマに合った作品20~30本をピックアップし、その作品のガイドブックづくりもプロジェクトの一環。映画祭への出品時に作品の紹介文は添付されて

くるが、先生たちはもっと詳しくわかりやすく紹介することで、より多くの人々に関心を持ってもらえるのではないだろうかと期待している。語学力をはじめ、さまざまな“知”を備えた大学だからできることであり、それを大学としての使命とも考えてい



岩久保円花

いわくぼまどか ●人文学部人間文化学科2年/宮城県出身。映画が好きで本演習を選択。ドキュメンタリー映画にはじめて触れ、その魅力がわかってきたところ。映画祭ではボランティアとして会場係を務める。

る。「現代若者とメディア」分野のガイドブックについては、市民団体の協力も得ながら映画祭に間に合うタイミングで刊行される予定になっている。

世相を如実に反映するそれが、ドキュメンタリー。

山形国際ドキュメンタリー映画祭の理事であり、インターナショナル・コンペティションの選考委員でもある阿部先生の目に近年の映画祭はどう映っているのだろうか。「世界各国、全国各地から応募作品も観客

おすすめドキュメンタリー映画ガイド (★印は2009年のインターナショナル・コンペティションに選ばれた作品です。)



S21 **クメルルージュの虐殺者たち**
カンボジア、ポル・ポト政権下で起きた大虐殺。犯行がなされたまさにその現場で、加害者と生き残った被害者とを対面させ、当時の様子を再現させるという問題作。
監督:リティ・パニユ/フランス/2002年



ルート181
パレスティナの分断を定めた国連決議181号。その分断の線を、イスラエル人とパレスティナ人の監督が旅しながら抑圧されるパレスティナの姿を記録する。
監督:エイラル・シヴァン、ミシェル・クレフィ/ベルギー、フランス、イギリス、ドイツ/2003年



鉄西区
中国東北部瀋陽市にある工業地区である鉄西区。かつては大きな繁栄を見ながら、現在では衰退しつつある同地区に生きる人びとの姿を写す大長編映画。
監督:王兵/中国/2003年



水没の前に
王兵「鉄西区」とともに、中国ドキュメンタリーの力を世界に示した見事な作品。三峡ダム建設で水没の運命にある村々とそこに生きる人たちの運命が胸をうつ。
監督:李一凡、鄒雨/中国/2004年



ナオキ★
2009年の映画祭一番の話題作。山形で撮られた、山形人についてのドキュメンタリー。日本のワーキングプアの現状を、愛と憎しみ(?)をこめて描く。
監督:ジョン・マカスター/日本、イギリス/2008年



事前チェックで当日の運営をスムーズに。映画祭開催を前に実施されたボランティア・スタッフのための試写会の様子。

ボランティア・スタッフ会議。会場係や語学スタッフ……、それぞれ担当する仕事の確認や互いの協力、連携について話し合われた。

も集まる名だたる映画祭に成長した山形国際ドキュメンタリー映画祭だが、地元の人々のドキュメンタリー映画に対する関心はまだまだ」と少し口惜しそう。劇映画ばかり見慣れている現代人はドキュメンタリー映画を食わず嫌いしているのではと分析した上で、「最初は勉強のつもりで観てみると案外おもしろいものだとということに気づくはず。好奇心を持って観てみるといいですよ」とアドバイス。岩久保さんや岡田さんのように背中を押されて観ることによって、その底知れない魅力にハマっていくものなのかもしれない。

映画祭に限ってはヨーロッパ系の作品に注目が集まりそうだ。また、山形を舞台とする作品も前評判が非常に高く、会場の混雑が予想されている。会場係ボランティアになっている2人にはぜひ、的確な誘導、笑顔の対応で映画祭の円滑な運営を強力にバックアップしてほしいもの。海外を含め、遠方からの来場者が多いイベントだけに、直接、接する会場係の印象は大切だ。

言語や文化に詳しいということで通訳やアシスタントとして頼りにされている人物もいる。忙しい仕事の合間を縫ってでも参加したい、協力したいとボランティアに励む卒業生もいる。さらに、本学に留学中の外国人学生たちは、母国と日本、双方の言語や文化に精通しているという点で来日する映画関係者や観客にとって心強い存在となっている。

総合大学という層の厚さを考えれば、映画祭との協力関係にはさらなる展開も十分に期待できる。互いにより実りの多い協力関係を築いていくためには、今回の映画祭終了後も継続的に交流や検討の場を設けていきたいところ。次回、「山形国際ドキュメンタリー映画祭2011」の際には、ドキュメンタリー映画が山大においてよりメジャーなジャンルとなって定着していることを願いたい。

先生、学生、卒業生、留学生もボランティアスタッフ

演習として参加している岩久保さんや岡田さんのほかにも、ボランティアとして参加している山大関係者は意外に多い。映画が好き、国際的なイベントを肌で感じたい、自分の語学力を試したいなど、動機はさまざま。司会進行や語学スタッフ、会場係やデイリー・ニュース発行、手話通訳、市民賞運営など、ボランティア・スタッフの仕事も多彩だが、大学生ならではの語学力を生かした語学スタッフや字幕係としての活躍が目立つ。また、先生方の中にも研究活動を通して外国との交流を深め、その国の

岡田真奈

おかだまな ● 人文学部人間文化学科2年 / 山形県出身。地元で開催されている映画祭に興味があったが参加するのははじめて。国際的なビッグイベントを体感できるチャンスとして本演習を選択。会場係ボランティア。



近年の応募作品の傾向としては、世界的な大不況や紛争の影響が強く感じられるという。そして、この山形の映画祭でインスパイアされた中国人監督の作品が著しい進歩を遂げているという見方もある。今回の

阿部宏慈

あべこうじ ● 人文学部人間文化学科教授 / 専門は、フランス文学、フランス文化論、映像論、表象文化論など。山形国際ドキュメンタリー映画祭の理事。今回はインターナショナル・コンペティションの選考委員を務めた。



アムステルダム(新)国立美術館 ★
レンブラントの「夜警」で知られる美術館で始まった大改造計画。その具体的な計画が明らかになるや起きた市民の反対運動。美術館改装計画の運命はいかに？
監督：ウケ・ホーゲンダイク / オランダ / 2008年



アポロノフカ棧橋 ★
ウクライナのセバストポリス湾のひと夏。棧橋にたむろする若者たち。毎朝ひと泳ぎしに来るお爺さん。海底に沈む鉄くずを拾う潜水夫。ゆったりとした時の流れ。
監督：アンドレイ・シュヴァルツ / ドイツ / 2008年



オート*メート ★
ハンガリーはブラハの町中にある日あふれ出す自転車の群れ。たちまち起きる大渋滞。車社会への警鐘？環境運動？ユーモラスで遊び心あふれるシネ・エッセー。
監督：マルチン・マレチュク / チェコ / 2008年



RIP!リミックス宣言 ★
既製曲をサンプリング、アレンジ、リミックスしてオリジナル曲を作るミュージシャン(ガール・トーク)。オリジナルティとは何かを問いつける挑発的な実験。
監督：ブレッド・ゲイラー / カナダ / 2008年



生まれたのだから ★
ブラジルの高速道路沿いの貧しい農村に住む子供たち。トラック運転手の休憩所や、土産物売り場で小銭を稼ぎながら暮らす。その子供たちの語る将来への夢。
監督：ジャン＝ピエール・デュレ、アンドレア・サンタナ / フランス、ブラジル / 2008年

人文学部

Faculty of
Literature and Social Sciences

いよいよ人文学部市民交流室「Agora」での活動が始まりました！



山形大学人文学部は、この度、教育・研究及び社会貢献において地域等との連携・交流活動を推進するため、人文学部2号館1階に市民交流室「Agora」を開設しました。市民交流室「Agora」は、本学部の教員及び学生が行う地域及び市民団体等との連携活動の場として使用する施設で、去る6月24日(水) 17時から、NPO団体「ぶらっとほーむ」のメンバーを迎え市民交流室「Agora」のオープンセレモニーが行われました。

オープンセレモニーでは、渡邊学部長から、この交流室を有効に活用して市民との交流を深めていただきたい旨の挨拶の後、本学部学生2名も加わり、早速、7月1日(水)から10回シリーズで始まる「NPO・市民活動入門ゼミ」運営についての打合せが行われていました。

また、9月からは、新たに市民団体「特定非営利活動法人国際ボランティアセンター山形」との連携活動も開始されています。

教育実践研究科と地域教育文化研究科の設置記念式典を行いました

地域教育文化学部

Faculty of
Education, Art and Science



山形大学では、6月18日(木)に山形大学大学院教育実践研究科(専門職学位課程)と地域教育文化研究科(修士課程)の設置を祝う記念式典・記念講演会・記念祝賀会が山形市内のホテルで開催され、来賓及び教職員を含む約150人が出席しました。結城学長の式辞に続き、久保公人文部科学省大臣官房審議官及び山形県知事の祝辞、来賓紹介、飯澤研究科長による研究科概要の説明並びに祝電披露が行われました。

また、式典に引き続き、梶田勲一兵庫教

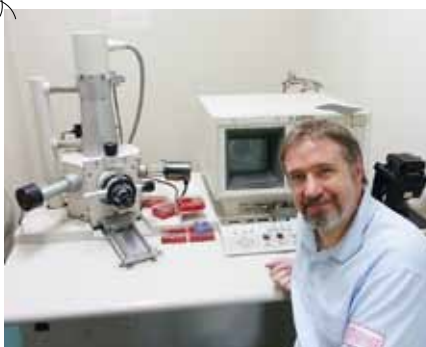
育大学長による記念講演「我が国の教育政策の現状と将来展望」が行われました。

式典、祝賀会を通して、両研究科に寄せる期待等が熱く語られ、教育実践研究科は、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新任教員やスクールリーダーの養成を、また、地域教育文化研究科は、文化的・精神的に豊かな地域の再生・発展に貢献できる高度な専門性を有する人材の養成を目指す新たな門出を祝いました。

理学部

Faculty of Science

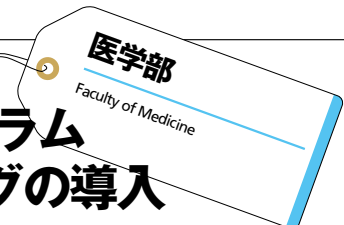
世界最古の海水珪藻の発見と北極海水形成時期の解明 英科学誌「ネイチャー」に論文発表



理学部地球環境学科のリチャード・W・ジョルダン准教授とノルウェーのトロムソ大学の研究者等による研究チームは、珪藻類の化石の存在などから始新世(約5500万年前)以降の北極の海水形成の一番古い時期を世界で初めて解明し、7月16日(木)発行の英科学誌「ネイチャー」に発表しました。これまで、氷山によって運ばれた岩石片の研究により、北極圏では約4500万年前に氷山が形成されたと考えられていましたが、陸上起源、海水起源のどちらの氷山により運

ばれた岩石片が定かではなかったため、海水の出現時期は明確ではありませんでした。今回の研究で、約4700万年前の海水に付着して生活する珪藻類の化石が大量に見つかり、その時期が明確になりました。一方、南極の海水形成は約4000万年前頃と推察されているため、始新世では北極海の方が早く海水が出現したと考えられます。今回の論文発表は、極域の海水形成を明らかにし、地球の温暖化、寒冷化のメカニズムを解明する手がかりに繋がる重要なものです。

看護学科における看護実践能力強化プログラム ニンテンドー DS[®]を用いた心電図トレーニングの導入



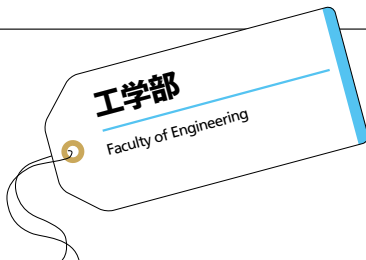
山形大学医学部看護学科では、臨床に直結する看護実践能力を強化するための新しい教育の取り組みとして、平成21年7月21日(火)にニンテンドー DS[®]を用いた心電図トレーニングを導入した学習を開始しました。

山形大学では、全国に先駆けてこのニンテンドー DS[®]を用いた心電図トレーニングを教育体制の中に組み入れました。看護学科3年次生を対象に、70台のニンテンドー DS[®]と心電図ソフトが準備され、循環器科

の専門医から心電図に関する講義の後、一斉にニンテンドー DS[®]と心電図ソフトが学生に配布され、学生の心電図の知識を確認しました。このニンテンドー DS[®]と心電図ソフトは学生全員に貸し出され、学生が主体的に心電図を読むための基本スキルを徹底的に学習し、習得状況を評価していくものです。この取り組みによって、臨地実習において実際の患者の心電図波形の理解とケア判断に直結する知識を強化していくことを目的としています。



ニンテンドー DS[®]を用いた心電図トレーニング風景



地域魅力発見バスツアーを開催

8月17日(月)～22日(土)の5泊6日にわたり、「地域魅力発見バスツアー」を開催しました。本ツアーは、大学生が山形県内の優良な中小企業を訪問することにより、実際に企業の「ものづくり」を実感し経営者の生の声を聞こうというもの。

ツアーには工学部の2、3年生24人が参加。出発式では、大場好弘工学部長が「自分で現場というフィールドに出ることにより、企業の力を受け取って成長してほしい。」と激励の言葉を述べました。学生達は県内の

魅力溢れる企業12社を訪問し、「ものづくり」の現場の空気を体感しました。ツアーが進むにつれて自らの興味や疑問点等の積極的な質問が増えるなど、参加した学生達には大きな意識の変化があったようです。

ツアー終了後には、「この経験がいつか結果として残るようなものにしたい。今後、班の人達との意見交換などを通して、数年後の社会人としての立場を見据えた自分構築を進めていこうと思う。」などの感想が聞かれました。



農学部サマースクール in ベトナム



8月19日(水)から25日(火)まで、農学部サマースクール(農学部短期間海外研修)を実施しました。引率された佐藤智准教授の紀行文をご紹介します。夕暮れ時に南シナ海から吹き寄せる潮風はどこまでも心地良く、地平線にきらめく稲妻を視界の何処かに感じながら、北ベトナムの名も無い丘を歩きました。遠くに点在する漁家のオレンジ色の灯火を背景に、我々に向かってしきりと手を振る子供たちの様子は、まるで影絵のように幻想的です。「田舎だからトイレは少しかたないよ」と、少し気恥

ずかしそうに彼女の故郷でもあるこの愛すべき僻村を案内してくれたトゥオイさんは、山形大学ハノイ分室で働いています。飛行機の窓からは儂い光の粒でしかないこのような村で、我々は実際に自分で歩き、呼吸し、肌で感じたのです。今回交流セミナーを実施したハノイ農業大学の学生の多くは、このような街灯も無い村の出身です。故郷とはまるで違う首都ハノイの雑踏の中で、常に視線の先に世界を見据えて邁進する同世代との出会いは、参加した学生諸君にとって大変刺激的なものでした。



**地形の変化を読み取り、
今後の動向を推定し、災害対策や
ハザードマップづくりに生かす。**

地域教育文化学部の八木先生の専門は変動地形学。今の地形がどうやってできたのか。地形とは、カタチ一つ一つが意味を持っており、地形を見ればかつてそこで何が起り、今何が起っているのかわかるのだという。こうした地形を読み取る技術を生かして、日本国内はもとよりネパール



このような航空写真から地形変化を読み取る。地下で起きている現象も膨らやへこみとなって地表にも現れるのだ。

やクロアチアなど海外でも調査を行い、地すべりなどの斜面災害に対するハザードマップの開発に取り組んでいる。その具体的手法としては、対象エリアの航空写真何千枚をも立体視し、地形のズレを探し出すという地道な作業。2004年の新潟県中越地震や昨年の岩手・宮城内陸地震の際にも現地へ行き、斜面災害の調査・分析にあっている。七五三掛地区の地すべりでも現在の地形の変形状況を読み取ることで災害の範囲を確定させ、今後どうなるだろうかということも過去のデータから推定して対策の指針を方向付ける役目を担っている。

地すべりは、粘土質の地層上に地下水がたまることで地層間の摩擦力が低下して引き起こされる。今回のように大規模かつ長期間にわたって地すべりが続いたのは、昨冬、特に雨がが多く、つねに地下水が供給される状況にあったことも影響しているのではと八木先生はみている。こうした見解を受けて、農学部の奥山先生が農村工学の立場からより詳しい調査・分析を行い、農村



八木浩司

やぎひろし ●地域教育文化学部教授 / 東北大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。変動地形学を専門とし、地形のズレから土地の現在・過去・未来を紐解く。国内外でハザードマップの開発に貢献している。

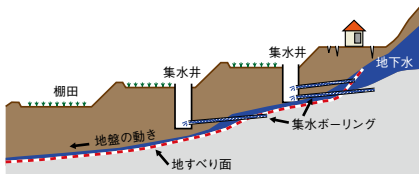
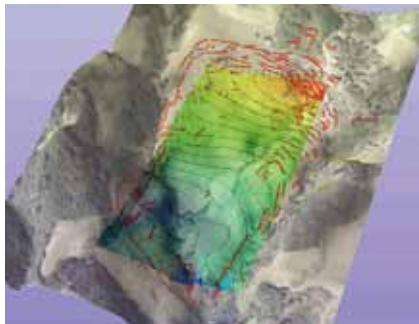
復興のための対策が図られる。

**農村、農地としての復興と
豊かな自然環境の保全の観点から
最善の対応をサポート。**

この春、農学部生物環境学科に赴任してきたばかりの奥山先生。まさに、着任早々の大規模な地すべり発生でいきなりの本領発揮となった。地すべり学会を通して以前から交流のあった八木先生と連携し、奥山先生は農村工学、環境保護の観点から七五三掛地区の防災と復興のための具体策を講じているのだ。農学部から車で約30分、週に一度は現地を訪れて状況の変化を把握している。住民が避難し、ひっそりとした現地では、水抜きボーリングのパイプ

七五三掛地区で発生した
大規模な地すべり。その対策に
貢献する二つの学部、二人の教授。

が随所に見られ、地下水をはき出していた。地すべり対策の基本は水抜き。地層の動きを人間の力で止めることは難しいため、水圧を下げることで動きを止めようとする摩



上図は、地表に生じた亀裂の分布と、調査ボーリングに基づいて解析した地すべり面の標高を示したCG。

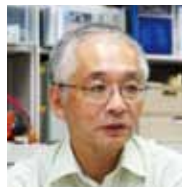
下図は七五三掛地区の地すべりと対策のイメージ。地すべり面に作用する地下水圧を低下させるための工事がすすめられている。

擦力の手助けをするというもの。それらの応急対策が功を奏して「7月以降にはほぼ動きが止まった」と奥山先生。

今後は、地元の人たちが末永く安心して暮らせるようにするための恒久対策がとられる。その際にも2人の先生にはさまざまなアドバイスが求められることだろう。地元の総合大学の強みを活かし、国・県・市と連携して復興に協力していきたいと考えている。

地すべりの実態が捉えられた事例、対応策に反映され、論文にも。今後の地すべり防止に活かしたい。

七五三掛地区を含む周辺一帯は地すべりの発生しやすい地域として警戒視され



奥山武彦

おくやまたけひろ ●農学部教授
／東京農工大学大学院農学研究科修士課程修了。独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構室長を経て、今春、現職に着任。地盤の計測、地下水流動調査を専門とする。



かなり深層で発生した今回の地すべり。より深い地層から地下水を排除するためにボーリングが進められている現場。

ていたエリア。地すべり活動が活発化するとすぐに、移動状況および移動量と降雨の関係把握が急務という考えから、山形県、農村工学研究所によりGPS等の観測機器が設置され、地面の動きの連続的な監視が行われた。それらのデータと踏査をもとに両教授ら6人の研究者は地すべり災害と降雨量との間に強い関連性があることを明らかにした論文を発表。今後の地すべり対策において大いに参考になるものと期待されている。

地すべりの全容解明に挑む、農地の復興を支援する。地元の災害で専門性を発揮。

八木浩司 地域教育文化学部生活総合学科教授 / 奥山武彦 農学部生物環境学科教授

今年、鶴岡市七五三掛地区で発生した大規模な地すべり。被害範囲は、幅400m、長さ700mに及び、ピーク時には1日で15cmもの変動が観測された。即身仏で知られる注連寺があり、映画「おくりびと」のロケ地という話題性もあって全国ニュースとしても取り上げられた。その対策技術検討会に本学の教授2名が委員として参加。ともに「日本地すべり学会」に所属する地域教育文化学部の八木教授と農学部の奥山教授が、それぞれ地形学と農業土木学の専門家として災害の把握と復興に向けての対策に協力している。

研究室訪問
〔農学部〕
〔地域教育文化学部〕

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 外来患者の診察にあたる土田先生。診療人数は夏場で一日140人前後。かなり過密なノルマながら患者さん一人一人にとっても丁寧な対応と評判。フレンドリーな笑顔で受診者の緊張や不安を取り去ってくれる。

2 昼食後の約1時間を往診の時間にあてている。寝たきりの患者さんが来院するのはとても大変。往診なら車で十分で済むのだからと、極力、往診の要請には応えたいと開業時の理念としっかりと貫いている。

3 高校時代にやっていた空手を再開して今では指導者。空手を通して子どもたちの心身を鍛錬するとともに、土田先生もエネルギーを充電。教え子たちは全国大会でも優秀な成績を取めるようになってきている。

地域医療の充実と子どもたちの健全な成長を願い、日々、往診に空手指導に奔走するドクター。

土田秀也 医療法人「土田医院」理事長

幼い頃、肺炎で命を失いかけたことがあるという土田秀也さん。その危機を救ってくれたのは往診に訪れた医師だった。そんな体験が少なからず土田さんの生き方に影響を与えているのだろう。中学の時に突然「自分は医者になる」と両親や先生に宣言。いずれ何かしら職に就かなければならぬ、それなら医者になって人の役に立ちたいという思いに駆られたのだ。土田さんの夢を両親や兄弟も後押ししてくれた。浪人はしてもいいが、私立大学はダメという指令通りに浪人はしたものの山大医学部に見事合格。大学では柔道部に入り、学業・部活ともに仙道前学長の指導を受け、学生生活を過ごした。他学部の学生たちとの交流を通して、みんなそれぞれ進む道に夢を持っており、医者もその一つに過ぎ

ないということに気づかされた。総合大学だからこそ得られた感覚、今思えばそれがよかったと当時を振り返る。

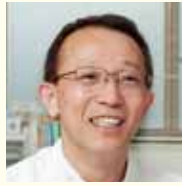
卒業後は、大学病院や県立病院での勤務医を経て11年目に開業。本当のところ、土田さんには開業の予定も意志もなかったのだが、ある出来事をきっかけに開業へと踏み切ることになる。それは、若いガン患者を病院で看取って感じた悲壮感と、寝たきりの患者を外来に連れて来る費用と家族の労力を考えると往診が望ましいにもかかわらず、それが叶わない現実。自らが理想とする地域医療に少しでも近づくために、患者さん本意の往診と日曜診療にこだわった「土田医院」を出身地である鮭川村のお隣、新庄市に開業させた。

地域医療と同様に土田さんが力を注いでい

るのが健全な青少年の育成。医院の敷地内には道場が併設されており、そこで空手の指導にもあたっている。土田さんの5人の子もたちもみな空手を通して心身を鍛えてすくすくと成長している。さらに、母校に対して何か支援をということで、来年度から「山形大学エリアキャンパスもがみ土田秀也奨学金」を創設し、新庄最上地域出身で山形大学への進学を希望する学生1名に奨学金を提供してくれることが決定した。「生まれ変わってもまた山大に入りたい」という言葉で山形大学への思い、誇りを語ってくれた土田さん。地域医療に献身的に尽くし、地域の子どもの健やかな成長を応援する、そんな卒業生を輩出していること自体、山形大学にとっては非常に誇らしいことといえるのではないだろうか。

信念の成果

今回のランナー:



土田秀也

つちだひでや●山形県出身。昭和61年医学部卒業と同時に大学病院第二内科入局。その後、県立新庄病院、東北中央病院等を経て新庄市内に「土田医院」を開業。往診を行う希少な医師として地域医療に貢献している。



相馬裕司

そうまゆうじ●新潟県出身。農業系サークル「ACT」代表。昨年11月に大学内では実感できない農業の現状や可能性を学ぶべく立ち上げた。農業は、国民の食を担う根幹産業、その重要性や可能性を日々実感している。

大学生ならではの発想でアクションを起こし、若い世代が農業の魅力に気づくきっかけをつくりたい。

実践の成果

相馬裕司 農学部4年

実家が農家というわけでもなく、農業を志していたわけでもなく、ただ何気なく入学した農学部で農業の大切さや魅力に気づきはじめたという相馬裕司さん。農業は国民の食を担う重要な産業であり、農業を豊かにすることは多くの人を豊かにすることにつながると考えるようになったのだ。それからは、純粋にもっと農業のことを知りたと思うようになったが、学内だけではなかなか実感が得られずに、農業のおもしろさを実感できる実習の場がもっとあれば感じていたという。さらに、昨年8月に参加した日本農業系学生会議(JASC)では、周囲の学生に大いに刺激を受け、もっと農業に近づきたいとの思いも重なって農業系サークルACT(Agricultural Community from Tsuruoka)

を立ち上げるに至ったのだという。

『農の現場を知ろう!』『食の現場を知ろう!』『農産物を作り、売ってみよう!』『皆で学んだことをシェアしよう!』などを活動方針とするACTのメンバーは現在15名。ACTの活動を支援しようという地元農家の厚意により10アールの畑を無償で借り受け、ニンジン、ジャガイモ、枝豆、オクラなどを栽培し、学内を中心に自分たちで販売まで行っている。地元農家のみなさんの栽培指導や野菜苗の提供などもあって、学生たちは大感激。感謝の気持ちは、繁忙期のお手伝いで表すことになっている。農業実習、活動資金となる売り上げ、地元農家との交流……、農産物以外にも収穫の多いサークル活動といえそうだ。

一方、大学の研究室では新規就農をテーマに取り組んでいる相馬さん。現在、さまざまな問題を抱えている日本の農業に若者がもっと関心を持ってくればと、関わるほどにおもしろくなったという相馬さん自身の実体験に基づいて、若い人が農業に関わるきっかけづくりをして、農業に引き入れたいと考えている。そこで、新規就農者をいかに効率のかつ能率的に育成するか。大農家の研修者に密着し、その実態と成果をレポートしている。その際にも、自分に農業体験があったからこそ突っ込んだ取材ができたこと、ACTでの活動がここでも生かされると実感。動きやすい大学生の今だからできること、これからの農業のあるべき姿を鶴岡から全国に発信したいとがんばっている。



1

1 鶴岡市大山のACT農場で枝豆の順調な生育状況にうれしそう表情のメンバーたち。地元農家のアドバイスをを受けながら枝豆のほかにもオクラやナス、ズッキーニなども栽培している。前列中央が相馬さん。



2



3

2 ACT農場で収穫した野菜の販路の一つは、毎週木曜日に農学部で開かれている農場市。売り上げは来年度の活動資金にあてられるとあって販売にも熱心。そして、地元の人々とのこうした交流も楽しみの一つ。

3 この夏、新潟県のNPO法人共存の森北陸の活動「高根ヒマワリフェスティバル」にイベントスタッフとして参加した際の一コマ。イベントの準備の合間にヒマワリ号にも乗せてもらってうれしそうな面々。

エリアキャンパスもがみ もがみめぐり

シリーズ⑧ 戸沢村



「エリアキャンパスもがみ」は、最上地区8市町村の豊かな自然環境を教育・研究・地域連携に生かそうと平成17年4月にスタートした大学と地域の新しい連携モデルです。最上広域圏全体をキャンパスに見立て、さまざまなフィールドワークや地域住民と教職員・学生との交流などを展開。山形大学のキャッチフレーズである「地域に根ざし、世界をめざす」やテーマとしている「自然と人間の共生」を具体的な形として実践しています。この「もがみめぐり」シリーズでは、毎回、一つの市町村をピックアップ。その地域の魅力とそこでの活動内容を紹介します。

ふるさとの自然、人、文化を誇りに、大切に。
里山の人々との交流に心温まり、志高まる。



もがみめぐりの最終回に登場するのは戸沢村。西に出羽丘陵の山々、東に新庄盆地、村の中央を最上川が流れる、ひととき長閑な里山。古くから庄内地方と最上地方を結ぶ水運の要と位置づけられ、現在は最上川舟下りの拠点として多くの観光客を集めています。また、日本における国民健康保険発祥の地という歴史を誇る共助の村でもあり、その精神は今なお健在。村の教育政策は独特で、「村民が皆共に育てる」と言う意味で役場には「共育課」という部署があります。2003年には、農山村の自然や文化を次世代へ伝えようと、「角川里の自然環境学校」を設立。山、川、食、農、ものづくり、民話などを題材に自然・文化体験学習活動が展開されています。

“共育”熱心な戸沢村は、フィールドワークの宝庫。2009年度もユニークなプログラムが多彩に用意された。前期は3プログラム。「戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ」では、古口地区の高齢者集団「乙夜塾」と地域活動団体「北の妙創郷大学」が実施している体験活動を通して、豊かな自然や地域の人々とふれあい、先人の生活や知恵を学んだ。「田んぼの学校とビオトープ編」では、地元の農業者とともに先進的な環境保全型の農業実践。地元農家との交流を深め、コミュニケーション能力を培った。さらに、「焼畑農法と自然エネルギー編」では角川の里で育まれた伝承野菜・角川カブを育てることや伝統的山業の技術である炭焼きを通して、里地里山の地域文化における自然との共生やエネルギー環境について、実践と理論の双方から習得。村内の各地で実り豊かな学びが展開された。

さらに、後期も興味深いプログラムが目白押しだ。10月末から11月に実施される「郷土料理と里山づくり編」では、具体的な調理技術をマスターすると同時に栄養学的見地からの食育の可能性について考察する。そして、11月・12月実施の「文化伝承と里山生活編」では、新たな地域計画を作成しプレゼンテーションする。さらに、冬本番の12月・1月には「冬の里山とまたぎ文化編」、「地域の文化と冬の自然体験」が予定されている。戸沢村ならではの体験を満喫し、それぞれの成長の糧としてほしい。



Area campus MOGAMI TOZAWA

1 戸沢村観光の目玉「最上川舟下り」、紅葉の季節。四季折々に移り変わる沿岸の風景が素晴らしい。2 教育実践研究(総合的学習)で竹巻きパン作りに挑戦。3 「田舎へ泊まろう！戸沢村編～希少生物の住む里～」で、伝統漁法の大綱引きを体験。4 「里の自然文化研究講座V 冬の里山とまたぎ文化編」で、マタギネを行った。実際に雪山で活動し、獲ったウサギを捌いて食べた。5 「戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ」で、古口小学校の学校行事「ホタル祭り」に参加し、小学生と一緒にカレーを作った。6 「戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ」で、古代米の稲を植えた。



平成21年度 JENESYS 2009プログラムによる短期留学生の受け入れ

平成21年度「21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYSプログラム)に基づくアセアン及び東アジア諸国等を対象とした学生交流支援事業」として、農学部と交流協定を持つハノイ農業大学(ベトナム)、キングモンクット工科大学(タイ)、ガジャマダ大学(インドネシア)より、計9名の短期留学生を半年間受け入れることになりました。この事業は全国で19課題が採択され、そのうちの 하나가、農学部が申請した「農・食連携環境保全教育研究支援プロ

グラム」でした。留学生は各大学から選考された将来を嘱望される1年生から修士課程の学生で、9人中8人が女子学生です。このプログラムは、現代社会が抱える食産業に係わる環境保全問題を、生産の立場からだけではなく、食料生産(耕作や放牧等による環境負荷)→流通(貯蔵や輸送による環境負荷)→消費(廃棄物や排泄物による環境負荷)という3つの視点から、総合的に捉え、その解決策を探ることを目的としています。期間中は、農業環境科学(講義)、農一食連携環

境保全学実験実習、山形フィールドサイエンス-2などを学ぶ他、他大学とのセミナー、地域の人達や日本人学生との交流事業、研究発表会、日本語教育など、滞在期間中多岐に渡るプログラムが準備され、効率よく学習できるよう配慮しています。農学部では、こうした将来のリーダーを育成する交流事業を通じて、今後ますます東南アジア諸国における大学との密接な連携を深めて行きたいと考えています。



結城学長(前列右から2番目)を表敬訪問



自己紹介の様子



真室川町での交流事業実施の様子

「花笠まつり」で日頃の鍛錬の成果を披露

山形大学花笠サークル「四面楚歌」代表
人文学部法経政策学科3年 小野寺 尚輝

私たち「花笠サークル四面楚歌」は、毎年夏に行われる花笠パレードに向けて、日々練習しています。パレード以外にも、旅館や老人ホームなどからの依頼があれば、そちらの方で花笠を披露させてもらっています。

「四面楚歌」とは、本来「周りを敵に囲まれる」というネガティブな意味ですが、私たちの四面楚歌は、「周りのお客さんも自分たちの踊りに巻き込んでしまおう」というポジティブな意味です。そのため、練習では、踊りそのものの形はもちろんですが、山大生らしく元気よく踊ること、

笑顔で踊ることに重点を置いています。

今年の夏も8月3、4日は上山、5、6、7日は山形、8日は天童パレードと、6日間連続でパレードに参加し、現役生だけではなく、OB、OGも駆けつけ、とても大きな団体となりました。スタート地点からゴール地点まで踊りきるのは本当に大変ですが、一緒に練習してきた仲間の頑張り、沿道の方々のあたたかい声援で、自分も最後まで踊り切ろうという気持ちになりました。場踊りでお客さんの方を向いて踊った後の、「カッコいいぞー」という声に笑顔になり、それを見て

お客さんも笑顔になったとき、これが自分たちの四面楚歌なんだと感じました。ゴール地点での感動は、私自身今年で3回目のパレードですが、この感動は何度味わっても最高です。

パレードは終わりましたが、私たちサークルは花笠の他にも阿波踊り、太鼓、おみこしなど様々なお祭り、行事に積極的に参加しています。一人一人がお祭りになると馬鹿になれるサークル、それが私たち「四面楚歌」です。

私たちと一緒に踊りて阿保になりませんか。踊らにゃ損々!!



花笠パレード、本番!!



四面楚歌全員集合!!



パレード、ゴール間近!!

ひらめき☆ときめき サイエンス ~ようこそ大学の研究室へ~



小学校5・6年生、中学生、高校生が、現在活躍している研究者と大学の最先端の研究成果の一端を見る、聞く、触れることで、学術と日常生活との関わりや、科学(学術)がもつ意味に対する理解を深めていただく機会を提供するプログラムです。普段は見ることのない、大学の研究や研究者との対話などから、科学の楽しさ、難しさ、不思議に触れて見ましょう。

11 | 14 (土) 工学部 10:00~16:00

有機の光を体験しよう

場所/工学部(米沢市)
募集人員/中学生 20名
参加費/無料
問い合わせ/工学部事務ユニット
研究支援チーム
TEL 0238-26-3004

10 | 3 (土) 農学部 9:00~16:00

生物の多様性を考える —土壌微生物・植物・昆虫間の相互作用—

場所/農学部3号館(鶴岡市)
募集人員/高校生 20名
参加費/無料
問い合わせ/農学部企画広報室
TEL 0235-28-2911

11 | 22 (日) 理学部 13:30~16:50

とんではねる活動宇宙

場所/SCITAセンター(山形市・理学部内)
募集人員/小学5・6年生とその保護者 25組
参加費/無料
問い合わせ/理学部事務ユニット
TEL 023-628-4505

入学試験

推薦入試I試験日(センター試験を課しません。)

出願期間 11月2日(月)~5日(木)(祝日を除く。)

- 人文学部(山形市)
11月17日(火)・18日(水)
- 地域教育文化学部(山形市)
11月17日(火)・18日(水)
- 理学部/物理学科(山形市)
11月16日(月)
- 医学部/看護学科(山形市)
11月19日(木)
- 工学部昼間コース/機能高分子工学科、物質化学工学科、バイオ化学工学科、応用生命システム工学科、情報科学科、機械システム工学科(米沢市)
11月14日(土)
- 工学部フレックスコース/システム創成工学科(米沢市)
11月14日(土)
- 農学部/食料生命環境学科(鶴岡市)
11月12日(木)

社会人入試試験日

人文学部
出願期間 10月26日(月)~28日(水)
地域教育文化学部・工学部フレックスコース
出願期間 11月2日(月)~5日(木)(祝日を除く。)

- 人文学部/法経政策学科(山形市)
11月7日(土)
- 地域教育文化学部/文化創造学科(山形市)
11月17日(火)
- 工学部フレックスコース/システム創成工学科(米沢市)
11月14日(土)

編入学試験日

出願期間 10月5日(月)~8日(木)

- 人文学部3年次(山形市)
11月7日(土)

別科試験日

出願期間 11月2日(月)~5日(木)(祝日を除く。)

- 養護教諭特別別科(山形市)

11月21日(土)

問い合わせ/入試ユニット

TEL 023-628-4141

公開講座等

人文学部

法を知って暮らしを守ろう

日時/10月5日(月)・19日(月)・26日(月)・
11月2日(月)・9日(月)
18:30~20:10

場所/人文学部講義室(山形市)
募集人員/一般の方、高校生、大学生 30名
参加費/2,000円(高校生、大学生は無料)
問い合わせ/人文学部事務ユニット
総務チーム
TEL 023-628-4203

人文学部・法学会主催公開講演会 なぜ日本には切られやすい 労働者がいるのか?

—正規・非正規労働者問題の背景と
改革の方向性

日時/11月10日(火) 13:00~14:30
場所/教養教育1号館115番教室(山形市)
募集人員/一般の方、大学生 200名
参加費/無料
問い合わせ/人文学部阿部未央研究室
TEL 023-628-4266

理学部

小さな科学者・体験学習会 わくわく化学実験ランド

日時/10月24日(土) 14:00~16:00
場所/SCITAセンター(山形市・理学部内)
募集人員/小学4年生とその保護者 10組
参加費/無料

山形大学の行事・催事のご案内です。
地域に根ざした大学としてみなさんのご参加をお待ちしています。

問い合わせ／SCITAセンター
TEL 023-628-4506

医学部

現場での心停止の治療法 —AEDの正しい使い方—

日時／10月3日(土)、17日(土)
13:00～16:00

場所／医学部大講義室(山形市)

募集人員／一般の方 50名

参加費／4,000円(ポケットマスク代含む)

問い合わせ／医学部総務ユニット庶務担当
TEL 023-628-5006



工学部

第9回山形大学工学部 重要文化財コンサート フランス・カフェ・ミュージック

日時／10月10日(土) 13:30～(開場13:00)

場所／旧米沢高等工業学校本館(工学部内)

対象／一般の方

参加費／無料

問い合わせ／工学部事務ユニット広報室
TEL 0238-26-3419



農学部

収穫体験 大学農場へ行こう!

日時／10月1日(木)～30日(金) (土・日・祝日を除く毎日 9:00～12:00)

場所／農学部附属やまがたフィールド科学センター 高坂農場(鶴岡市)

内容／リンゴ狩りと家畜(牛・羊・山羊)見学

募集対象／幼稚園・保育園児等(団体)1日2団体まで

参加費／収穫物代金のみ
問い合わせ／農学部附属施設チーム
TEL 0235-24-2278



附属博物館

美術館でアートに親しむ

日時／11月28日(土)、12月5日(土)、
12月12日(土) 13:30～17:00

場所／山形美術館(山形市)

募集人員／一般の方 50名

参加費／2,000円

問い合わせ／山形大学附属博物館
TEL 023-628-4930

附属学校

特別支援学校

高等部ハートバザー in 山大

日時／11月5日(木)、6日(金)
10:40～14:30

場所／山形大学小白川キャンパス中庭(山形市)

募集人員／一般の方

問い合わせ／山形大学附属特別支援学校
TEL 023-631-0918

公開研究会

日時／11月27日(金) 9:20～16:00
場所／山形大学附属特別支援学校(山形市)

募集人員／一般の方 定員はありません

参加費／一般 2,300円、学生 1,700円

問い合わせ／山形大学附属特別支援学校
TEL 023-631-0918

学習発表会

小中学部ステージ発表 高等部ハートバザー

日時／12月18日(金)
ステージ発表 10:00～10:55
ハートバザー 11:15～14:00

場所／山形大学附属特別支援学校(山形市)

募集人員／一般の方 定員はありません

参加費／無料

問い合わせ／山形大学附属特別支援学校
TEL 023-631-0918

大学祭

小白川キャンパス

八峰祭

日時／10月24日(土)・25日(日)

場所／小白川キャンパス(山形市)

内容／大学生クイズ、野外特設ステージ、中夜祭、ハッピーパーク、なんでも質問コーナー

問い合わせ／課外活動担当

TEL 023-628-4121



工学部

吾妻祭

日時／10月9日(金)～11日(日)

場所／9日 米沢女子短期大学構内

10日・11日 山形大学工学部構内

テーマ／響～harmony～

内容／FLOW LIVE、キャン×キャン爆笑ライブ、ものまね選手権、フリーマーケット、お化け屋敷、中夜祭、吾妻さんちのフレンドパーク、米沢の伝統工芸紹介・体験・展示、研究室公開

吾妻祭HPアドレス

<http://www.geocities.jp/azumasai2009/a/azumasai.html>

農学部

11月祭

日時／10月31日(土)・11月1日(日)

場所／農学部(鶴岡市)

内容／野菜即売会、研究室紹介、模擬店・フリーマーケット、サークル発表、もちつき



創立60周年記念事業 大学歌募集

Yamagata University 60th Anniversary

山形大学は昭和24年5月に新制大学として発足し、今年で創立60周年を迎えます。その記念に大学のシンボルとして大学歌を制定することにいたしました。つきましては、大学歌の歌詞を下記のとおり公募しますので、奮ってご応募ください。

公募期間 平成21年6月23日(火)～10月20日(火) **必着**

賞金 **最優秀作品 100万円** **優秀作品 20万円**

応募要領等

- (1) どなたでも応募できますが、作品は自作・未発表のものに限ります。
- (2) 提出様式は自由としますが、作品はA4用紙を使用してください。
- (3) 所定の応募用紙に必要事項を記入の上、作品とともに下記に郵送してください。
- (4) 応募点数に制限はありませんが、各作品に必ず応募用紙を添付願います。
- (5) 作曲も行いたい方は、DVD等に歌詞と一緒に録音の上、ご応募ください。

選考 山形大学大学歌選考委員会で選考し、選ばれた作品については、応募者に直接連絡するほか、山形大学のHPに掲載します。

その他、詳細については、本学HP又はチラシ等でご確認ください。

<問い合わせ先>

山形大学総務部総務ユニット

〒990-8560 山形県山形市小白川町一丁目4番12号

電話 023-628-4006

E-mail somsomu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

※応募用紙は大学のHPからダウンロードできます。

<http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>

編集後記 Editor's Note

例年より涼しい夏から季節は秋を迎えました。山形の川原では芋煮会の光景が見られ、周囲の山々が赤や黄色に色を変えてきています。秋は「芸術の秋」、「実りの秋」などとさまざまに形容されます。今回は、今年の山形の2つの大きなニュースに関わることを取り上げました。一つは「山形国際ドキュメンタリー映画祭」(特集)であり、もう一つは「鶴岡市七五三掛地区の地すべり」(研究室訪問)です。これに限らず、これまで取り上げてきた特集などを読み返してみても、私たちのまわりで起きている出来事や毎日のニュースの多くに山形大学が深く関わっていることを実感します。本誌の重要な役割の一つは、そういった情報を大学から発信することにあります。これから私たちの教育研究活動が地域の芸術や実りをしっかりと支えていくことを願っております。

(みどり樹編集委員会委員 出口毅)

表紙のことば

映画祭と大学との連携事業の一環として小白川図書館内にオープンしたシアタールーム。7月には映画祭の予告PRも兼ねて、ロバート・フラハティ監督の「極北のナヌーク」が上映され、誰もがその圧倒的な映像力に魅了された。

- この「みどり樹」は下記URLからもご覧になれます。
URL : <http://www.yamagata-u.ac.jp/html/kouhoushi.html>
- 「みどり樹」に対するご意見・ご質問等をお気軽にお寄せください。
E-mail : sombun@jm.kj.yamagata-u.ac.jp
- 「みどり樹」は、3月、6月、9月、12月に発行する予定です。

— 地域に根ざし、世界を目指す —

 **山形大学**
Yamagata University

山形大学ホームページ <http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>